

## 作業療法士によるリハビリテーション

－作業パワーで、人生を謳歌する－

株式会社 LILYS

平川 雄介

(作業療法士 作業パワー 健康と幸福)

### 1. 目的

皆さんは作業療法士をご存じだろうか。よく持たれるイメージとして、手を見る人、積み木並べ、編み物が挙げられる。作業と聞くだけでも、何か作製や操作することだと想像されがちであるが、それには大きく誤解がある。実は作業療法士が指す作業とは、“その人が大切にしていること（したいこと）”である。本来作業療法士はこの“作業”を治療道具とする。「したいことは、病気が治ってから」という常識を覆し、「したいことをして病気を治す、と同時にしたいことをできるようにする」、そんなユニークな専門職である。だが病院や施設、地域におけるリハビリテーションには制限や規則が多くあり、作業療法士が人を作業に結び付けるという役割を担えていないケースは多い。特に、理学療法士と同じようなことをする作業療法士も多く、誤解が生じ、認知につながらない作業療法士の役割について、今回一症例を通してまず知っていただきたい。

### 2. 症例を基に伝える、作業療法士によるリハビリテーションの価値

70代女性。脳梗塞発症後、右片麻痺の後遺症により約10年車いすによる介助生活を送られていた。「籠の鳥になりたくない」という思いから、リハビリで歩行訓練に励んだこともあったそう。だが数回の転倒を機に恐怖心が芽生え、以降歩行は全くしなくなる。多くの時間を家で寝て過ごしている、とても暗い印象のご本人であった。今回は、「自由に、どこでも行けるようになりたい」という思いを作業の中核に置いた。介入にあたり導入した電動車いすを用い、したいことを実践し、評価・支援・フィードバックを繰り返す。

作業療法士が介入して約2年。ご本人は電動車いすで共に行った場所であれば自由に行くことができるようになった。その移動距離年間約360km。電車も利用し、行く所々、日々の出来事等を写真に収めSNSで発信するのは、今、毎日の日課である。また、ヨガ・アトリエ教室等の楽しめる居場所が広がり、現在は家よりも外に出ている時間が長いと話す。今や暗かった印象が思い出せないほど明るい元気なご本人は、装具を外して素敵な色の靴を履きおしゃれを楽しむ。当時配食サービスを利用されていたが、今はほぼ毎日片手で料理を作る。息子さんやご友人のために振る舞い喜んでもらうことは、今大切にしている作業の一つとなった。「心が動けば、体も変わる」という名言を体現するように10年経った今、手すり支持がなくても起立・立位保持・移乗可能となった。よって、最近SNSの写真の投稿はいつも立位だ。「楽しいことはなによりも薬」「一つ自分ができることを見つけられたら幸せになる」と話すご本人は、正しく「したいことをして病を治す」、作業パワーを証明し続けている。

#### 【一緒に実践したことの一例】

電動車いすで電車とタクシーに乗る・美術館に着物展を観に行く・鎌倉で人力車に乗る・アートフェスティバルに参加して、床でアート活動に参加する・湯船に浸かる・一人で行ける

